令和7年度「全国学力・学習状況調査」の結果
－分析から見えてきた成果・課題と今後の取組について－

区　　名　西成区

学 校 名　北津守小学校

学校長名　石倉　雅之

文部科学省による「全国学力・学習状況調査」について、令和７年４月17日（木）に、６年生を対象として、「教科（国語・算数・理科）に関する調査」と「児童質問調査」を実施いたしました。

大阪市教育委員会では、保護者や地域の皆様等に説明責任を果たすとともに、より一層教育に関心をお持ちいただき、教育活動にご協力いただくため、各学校が調査結果や調査結果から明らかになった現状等について公表するものとしています。

本校でも、調査結果の分析を行い、これまでの成果や今後取り組むべき課題について明らかにしてまいりましたので、本市教育委員会の方針に則り公表いたします。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部分であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。

１　調査の目的

義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。さらに、そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

２　調査内容

(1) 教科に関する調査

・国語
・算数
・理科

(2) 質問調査

・児童に対する調査
・学校に対する調査

３　調査の対象

・国・公・私立学校の小学校第６学年の原則として全児童
・大阪市立北津守小学校では、第６学年　２２名

学校名　北津守小学校

令和７年度「全国学力・学習状況調査」結果の概要

本年度の平均正答率は、国語科・算数科・理科全てにおいて全国平均よりも下回る結果となった。
国語科では「B 書くこと」「C 読むこと」の項目において、全国平均より大きく下回ったが、「（2）情報の扱い方に関する事項」の項目は全国平均を上回った。
算数科では、「B 図形」の項目が全国平均に迫っていたが、「C 測定」「D データの活用」の項目で全国平均を大きく下回った。
理科ではどの項目も全国平均より20ポイント以上下回っている。
どの教科も無回答率は全国平均を上回っているが、特に算数が大きく上回っている。
児童質問紙では「学校に行くのは楽しいと思いますか」の項目では、最も肯定的な回答の割合が52%であり、全国に比べ上回っていた。また、「人の役に立つ人間になりたいと思いますか」の項目では肯定的な回答の割合が90%を超えている。児童数は少ないが、縦割り班活動や学級でのお互いを理解する活動を多く取り入れることで、他者への思いやりを持ち、行動することがでているようになってきている。

分析から見えてきた成果・課題

教科に関する調査より

［国語］
国語科では昨年度の結果と比べて、ほとんどの項目において全国平均との差が縮まってきていた。しかし、ほとんどの項目で全国平均を下回る結果となった。特に「読む」「書く」「思考・判断・表現」「記述式」の項目で全国平均と大きな差がでた。その中で全国と最も差が出たのは、言葉と図を用いて説明することの良さはどういうものかを答える問題であった。
文章を書く目的や意図に応じて伝えたいことを明確にすることの重要性に気づかせ、自分で活用できるように指導することが重要である。
また、目的や意図に応じて、日常生活の中から話題を決め、集めた材料を分類したり関係づけたりして、伝え合う内容を検討することに課題が見られた。知りたいことについて、予想したり聞いたりしたことやわかったことをまとめ、それらの関係を明確にして結びつける活動をしていく必要がある。
今年度の「全国学力・学習状況調査」の結果と、昨年度（5学年時）の「すくすくウォッチ」の結果との比較から、「言葉の特徴や使い方に関する事項」「書くこと」領域の学年平均で3．8ポイント以上の向上が見られた。現在行っている「マイクロステップスタディ」を今後も継続し、読み取りのための語彙を増やしていく。

［算数］
算数科でも昨年度の結果と比べて、ほとんどの項目において全国平均との差が縮まってきている。しかし、ほとんどの項目で全国平均を下回る結果となった。最も正答率が低かったのが、平行四辺形の書き方を説明する問題であった。日々の学習で行ってきているかき方であるが、言葉で説明するとなると答えることができない。日々の学習で説明するための言語活動を充実させていく。

［理科］
理科では全ての項目において、全国平均を下回った。特に全国平均と差が大きかった問題の共通点は、必要な情報の把握と活用や、根拠に基づいた説明をすること。日々の学習で、解決したい課題や実験の目的を明確にしたうえで、資料の中から必要な情報を取捨選択し関連付けて読み解くことができるような活動を習慣化する。また、主張や根拠を意識して文章を構成するよう意識づけていく。

質問調査より

児童質問紙から、肯定的な回答が90%近くあった項目は「人の役に立つ人間にないたいと思いますか」「いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思いますか」だった。友達や周りの人を大切に思い、行動する人権意識が育まれている。
「学級活動における学級での話し合いを生かして、今、自分が努力すべきことを決めて取り組んでいますか」の項目は、肯定的な回答が全国平均を上回っている。学習や様々な体験活動を通して他者を認め、傾聴する雰囲気づくりをすすめることで、話し合いのしやすい環境をつくっていることが結果に反映されたと考えられる。
また「授業や学校生活では、友達や周りの人の考えを大切にして、お互いに協力しながら課題の解決に取り組んでいますか」「人が困っているときは、進んで助けますか」の肯定的な回答の割合は80%を超えている。友達のことを思い、行動することを大切にしていく意識をこれからも育んでいく。

今後の取組(アクションプラン)

本校では、児童数が少ないことをメリットととらえ、学級だけではなく、縦割り班での活動に多く取り組んでいる。高学年が中心となり、話し合いやグループ活動を進めることで、高学年がリーダーとしての意識を自覚し、行動するようになってきている。さらに、一人一人の児童が自分自身で考え、行動できるよう取り組みをすすめていく。

学習においては、ホワイトボードやグループでの話し合いだけではなく、学習者用端末を活用しながら話し合い活動を進めている。自分の意見をわかりやすく伝えるための工夫をしたり、グループで協働的に取り組むことで自分の理解を深め、さらに自己肯定感を高めることにつながっている。今後も、様々な考えに触れる機会や体験活動を通して、より一層自分の考えを互いに深めていけるように取り組んでいく。

また、本校には外国にルーツのある児童がたくさん在籍している。人それぞれ、多様な文化や価値観を認め、共生していく、人権を尊重した教育を推進していく。